
私、サイボーグになって現代に戻ってきました

窪まり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私、サイボーグになって現代に戻ってきました

【Nコード】

N8261Z

【作者名】

窪まり

【あらすじ】

5年間、かずみと同棲した未来から来たアンドロイドにあうため自分の肉体を冷凍保存して200年後の未来に行った。彼女はサイボーグとして蘇った。200年後の世界は、どんな社会なのか不安と期待が入り交じる。だが、5年間、同棲したアンドロイドの正体を知って驚いた。そして、21世紀初期の現代に戻る。百合描写がありますので、苦手な方は、移動してください。

私、未来に行きました。

かずみ20歳は、200年後の未来から来たアンドロイド199Jpと5年間、同棲し百合関係を続けた。そして、再び時空の歪みが生じて、アンドロイド199Jpは未来へ帰ってしまった。

かずみは25歳になり、はじめて性風俗デビューすることになった。そして5年後、30歳になったとき、奇跡的に宝くじで1億円が当たり、自分の身体を冷凍保存するために渡米した。

大量の睡眠薬を飲み自殺した。遺書には、「私が死んだら、わたしの身体を200年後の未来になったら、再生できるように冷凍保存してほしい」という内容だった。

かずみが再生されたとき、冷凍保存のため脳だけしか再生できる細胞がなく、身体全体が人工有機？で構成されたサイボーグとして蘇った。

今までアメリカの某ホテルの部屋で寝たと思ったら、目が覚めたとき、周囲は見たことないような風景だった。周囲には見たことがない白い箱（たぶん機械）がたくさんあり、空中にいくつものスクリーンが映し出された。かずみは自分は、ついに念願の200年後の未来に来たと喜んだ。

「アンドロイド199Jpに会いたい」と心の中で願った。

周囲にはいろんな人種の人たちが、肌に密着するような白い服を着ていた。現代人から見れば、異様なデザインである。

かずみは、ある程度までなら英会話でき、英語も聞き取れるが、かずみの周りにいる人は、なに言っているのか理解できなかった。

「おっはー。ようこそ」と英語で話しかけられた。

褐色の肌の女性が、かずみの手を取った。そしてゆっくり立ち上がった。

「あの今は西暦何年ですか？」と英語で訪ねた。

褐色の肌の女性は、かずみの英語が理解できないので、もう一度、ゆっくり話しかけて欲しいような雰囲気でした。褐色の肌の女性は、ペラペラした薄い紙ディスプレイをもってきて、指で質問を書いて欲しいような仕草をした。

かずみは、指で英語で「今、西暦何年？」と書き、それを呼んで褐色の肌の女性は、ディスプレイに「西暦2197年」と書き記した。

「やったー！ついに未来に行けた」

2000年近く死んでいたので、全く夢がない睡眠のようだった。アメリカの某ホテルのベットで寝たと思ったら、目が覚めたら、一瞬で周囲は、理解できない物ばかりだった。

「私、アンドロイド199Jpに会いたい。どこにいるの？」と尋ねたら、

褐色肌の女性は「あなたがアンドロイド199Jpです」と言われた。

実は、かずみそのものがアンドロイド199Jpになっていた。

かずみの希望どおりに、かずみの身体は冷凍保存され、2197年のある日、理想的な身体として蘇った。身長はやや低く（170センチから165センチ）なり、顔も女つぽい顔になった。髪の毛が長くなり、ある日本人アイドルの顔をモデルにした顔になっていた。とてもかわいらしい顔になっている。

全身を映す鏡をみて、自分の姿を見て、うっとりした。

「肌がすべすべ。ツルツルしている。この辺にいた女子高生よりもきれい。スタイルも顔も理想的。まさに芸術！」と喜んだ。

元々スタイルが良かったが、もつと理想的な身体になり、バストが大きくなり、ウエストがより細くなった。顔とスタイルが変わった。何か違和感を感じると思ったら、自分の身体に性器も肛門もないことに気がついた。

かずみは、そのことについて悲しんだ。性器がないことはオニイができない。

肛門がないから食事もお酒も飲むことできない。

あの5年間の生活は、実は自分自身とのエッチな行為だったと思った。

「あの5年間は、私そのものとエッチな事を毎日していたのね。どうりで私の趣向を上手く読み取っているから、良くてきたアンドロイドだと思ったが、実は私の脳で動くサイボーグだったのね」

「遅かれ早かれ、再び21世紀の私が住んでいたアパートの部屋に

戻る。私、自身との百合関係が始まるのね」

「でも、食事もできない。お酒も飲めない。性器がないからオナニーもできない。これから私はどうするの？」と悩み、

褐色肌の女性に、食事とお酒について尋ねた。

彼女はペラペラした紙ディスプレイを持ってきて、「逆に無駄が省けて合理的。食事をしたいと思つたら、サーボーグ用のガムを噛めばよい。脳に美味しい味と満腹感をあたえるから。お酒が飲みたければ、コンローラーでお酒飲んだ気になれる」と21世紀の英語、褐色肌の女性にとっては古い英語に訳された文字がでてきた。

かずみは日本語で自由に会話したいと思つた。

少し恥ずかしそうな表情で、かずみは褐色肌の女性に尋ねた「オニーは、どうしたら良いの？」褐色肌の女性は「時間の無駄。もつとこの社会には楽しいことがある。でも、どうしても性的快感を感じたいなら、バーチャルリアリティセンターに行けば脳を刺激してオニーよりも気持ち良いことができる。また、なりたい自分になれる」と言った。

いずれ、もとの私のアパートに行く宿命がある。確実に、私自身との再会がある。未来社会の生活に慣れる必要がある。どんな社会なんだらうか期待と不安が入り交じった。

私、バーチャリアリティを体験しました

22世紀の未来社会の娯楽は、バーチャルリアリティである。個人の妄想をリアルに体験することができるのである。

だが22世紀の社会では、人間は異様な服装をしていた。そして、アンドロイドや全身がサイボーグになった人は、街中でも全裸である。かずみは何でもいいから服を着たいと思う。全裸で歩き回るには、恥ずかしい物があるから、せめてショートパンツとタンクトップが着たいと思った。

でも、頻繁に全裸の美女や美男が歩き回っているので、次第に目が慣れてしまった。

バーチャルリアリティセンターへ歩いて行ったが、どんなに歩いても足が疲れない。外はとても寒く、他の人は白いつなぎのような服装であるが、息が煙のように凍っている。零下10度である。

全身をサイボーグにした人には、なぜ服が必要無いのか、それは感覚遮断を意識的に行うことができるのである。だから寒さを全然感じない。かずみも、不快な感覚を意識して遮断することができるのである。

かずみは、サイボーグ食を食べた。カレーライスを食べたいと思ったら、サイボーグ食から美味しいカレーの味がしてきた。口の中が温かく感じる。サイボーグ食は本来は脳だけに栄養と酸素を送るだけの食品だが、味覚を自由にコントロールすることができるのである。カレーライスの味だけでなく、考えるだけで、ビーフシチューの味もするし、何度も噛むほど、満腹感を感じるのである。

歩きながらサイボーグ用のガムを噛みながら、バーチャルリアリティセンターに到着した。

かずみは、未来社会は高いビルがあつて、そら飛ぶクルマが空中を移動しているのを想像したが、22世紀末の未来の風景は、ほとんど低いビルがあり、白っぽい建物が多く、やたらと樹がたくさん生え、寒い季節なのに、きれいな花が咲いている。造花だと思つたら、本物の花なのである。

かずみが未来に来てから3ヶ月後、12月の未来都市は、とても寒かつた。

全裸で歩くと、変な感覚だが、かずみの他にも全裸の美男・美女がいるので、次第に慣れてきた。

早速、アイドル顔になった私（アンドロイド199Jp）、かずみはロリっぽい女の子とエッチな事することを体験した。

周囲の景色が、21世紀初期のかずみが住んでいた街の風景になり、そこで自分の妄想に集中すると、自分が想像したロリっぽい顔の美少女とであつた。

「どこかラブホテルでもないかな」と考えたら、周囲は急に現代風のラブホテルになり、早速、ロリっぽい顔の美少女の服を脱がせ、エッチな事をした。

それを16時間連続で行うと、急激な睡魔に襲われ、全く夢のない睡眠に至る。

気がついたら、かずみはバーチャルリアリティセンターの床で、3時間ほど熟睡していた。全く夢が無い、とても深い眠りだった。

かずみは「確実に、私はアンドロイド199Jpとして、20歳のときの私かずみのところに戻る運命かずみ」だと思った。

私、砂糖で、できた美少女人形なの（前書き）

しばらく、書き込んでなかったの、短くても連載を続けたいと思います。

今後もよろしくお願いします。

私、砂糖で、できた美少女人形なの

かずみが会いたがった、アンドロイド199.jpgは、かずみ自身であった。

かずみは、数年間、むさぼるようにサイボーグ食を食べ続けた結果、酸素と糖分を供給しない状態で5年半もつような身体になった。だから水中でも真空中でも生活できる身体になったわけである。

突然、火星開発事業の仕事のオファーがあったとき、自分の運命が変わると思って、残念に思った。いつまでたっても時空の歪みが起きないからである。

月面や火星の場合、人間が行く必要がなく、ほとんどがアンドロイドか全身サイボーグ化した人のみである。

火星を数万年後には、地球と同じ環境にするために、火星開拓と称して、火星の表面に氷点下でも育つ藻を植える作業を行うことである。

サイボーグになった、かずみは、月面基地に向かうロケットに乗ろうとした直前、大量の酸素と脳の栄養である糖分を補給していた。そのとき時空の歪みが生じた。

太陽よりも明るい光が差し、かずみはそこに吸い込まれた。

そして、2006年の自分のアパートの窓に到着した。全く謎である。それも都合良く、自分の部屋に行くなんて。

そこにいるのは、20歳の かずみである。

サイボーグになった、かずみから見ると、とてもおとなしそうな少年のように見えた。

自分で自分の顔をみるのは変な気分である。それも写真でも鏡でもなく、直に自分の顔をみるのであるから。

「わたし、5年半分の酸素と糖분을補給したまま自分が住んでいた部屋に戻ったわ」と思った。

「わたしの本当の顔って、とてもボーイッシュ。なんだか、とてもおとなしそうな少年そのもの」

そう思ったとき、20歳のかずみが、いろいろ話しかけて来たが、無意識に「私の稼働時間は、50075日」としゃべった。

目の前には、飲み物や食べ物があるが、それを口に入れる訳にいかない。

食べられるのはサイボーグ食のみである。

5年半分の酸素と糖分では、身体のほとんどを占めている。それが無くなれば皮だけスカスカになる。

『私の身体は、酸素と糖分でできている動く人形なんだ』と思った。

『砂糖で、できた美少女人形なんだ』物理的に考えればそう思う。

かなり密度が高い未知の物質できていると考えられる。現代科学では解明できないもので、アンドロイド199Jpはできている。

そして、20歳のかずみによって、お風呂に入れられ、そして20歳のかずみに愛撫された。

「なんだか、とても大人しそうな男の娘に抱かれているみたい。20歳の、わたしってこんなに身体が硬い。だから性風俗をしても、リピーターが来ないわけだわ」と思った。胸の膨らみもほとんど無く、身体には、ほとんど弾力がない。抱かれても、まるで痩せている男性に抱かれたような感覚である。

初めて自分で自分の身体を抱かれた感覚を体験した人類最初の人間、それが、サイボーグになった、かずみである。

私、なんだか男の娘と一緒に風呂に入っているみたい

サイボーグになった、かずみは現代に戻り、20歳のかずみとお風呂の中で抱き合った。

20歳のかずみは、サイボーグになった私に口づけをした。

そのとき、かずみの敏感なところに指で触った。

「ああん・・・。」20歳のかずみはあえぎ声を出した。

20歳のかずみを抱かれても、肋骨がダイレクトに感じる。心臓の音が伝わる。お尻は小さい。身体全体に弾力がない。

20歳のかずみは、サイボーグになって現代に戻った私そのものである。

サイボーグになった私は、20歳の私の胸で感じさせた。そして、恍惚と思えるような表情をしていた。

20歳の私の太ももは、肌がきれいだが、弾力が足りない。太ももをさすった。

さすられることで、20歳の私は、性的に感じた。

お風呂のお湯がぬるくなり出した。

20歳のかずみに教えてもらことなく、追い炊きのスイッチを押して、お風呂のお湯を温めた。

時間がたち、20歳のかずみはお風呂の湯船の中で寝てしまった。

サイボーグになった私を愛撫し続けて、2時間がたった。20歳のかずみは、居心地の良い疲労でお風呂場で寝てしまった。

そして、20歳のかずみが目が覚めたとき、サイボーグになった私の太ももを、真っ先に見えるような体制にした。

サイボーグになった私は、次の行動が予測できた。

お湯からでて、いきなり抱かれた。サイボーグになった私の胸の感触に感動した。

そして、サイボーグになった私は、かずみの感じやすいところに指を入れて、すこしでも早く、液をだそうとしたが、サイボーグの私は、次の行動が読めた。

一緒に布団に入り、レズプレイを続けるつもりだった。

気がついたら、早朝の4時になった。

20歳のかずみは、サイボーグとして現代に戻った私に対して、「こんなに気持ち良い思いをさせてくれて、ありがとう」と言った。

一日中、サイボーグとして現代に戻った、かずみは、20歳のかず

みと、一緒に、疲れ果てるまで、レスプレイをすることになった。

私、「メイ」と名付けられて

20歳の かずみは、急遽、バイト先の会社に休むために連絡をした。風邪で休むことにした。

20歳の かずみは、未来から来た私に、何か良い名前がないか考えた。今は西暦2006年12月、もうじきクリスマスの時期である。ブラウン管式の小さなテレビを、20歳のかずみがつけると、幸せそうなカップルがでてくるが、20歳のかずみは、未来から来た私と一緒にいるだけで幸せなのである。

「ねえ、わたしあなたの名前を考えたの。メイちゃんというのはどうかな?」「もし、気に入らなかつたら、別の名前でも良いけど」と言われ、「私のこと何でも呼んでも良いわ」と答えた。

2006年12月初旬、私はメイと呼ばれるようになった。

「でも、メイちゃんは、身元不明の女の子だからバイトもできないし、今の私に良いコネがあるわけでもないし……。でも、洋服代と電車賃は私が払うから。で、全然、食事もできないの?」

メイと名付けられた私は答えた「はい。私、全然、食事することができないです」と言った。

そのときメイと名付けられ次に何をするのか予測(?)できた。というか、10年前の記憶をたどれば解るのである。

デパートのランジェリーショップと一緒に行くことである。

午前10時、デパートが開店した。「ねえ、かわいらしいブラを買
いましょう」とメイに話しかけた。

メイとは、未来から戻った私、かずみの名前である。

たしかに、10年前のかずみの服は、胸のところが窮屈である。か
ずみはAカップでもぶかぶかなのである。

10年前のかずみは、ショートカットでボーイッシュでいかにも元
気がある少女みただけど、内心はとても気が弱い女である。

かずみは、長ズボンのジーンズに黒のジャケットをはおり、その上
に黒に近い灰色のジャンバーを着ていた。

メイは、感覚遮断があるので、どんなに寒くても平気だが、周囲か
ら不自然に思われないために、かずみのジャンバーを着せて膝丈の
スカートを穿いた。押し入れの中を探して、長い間眠っていた、女
の子らしい色彩とデザインの洋服である。

遠くから見ると、男女のカップルみたいだった。

でも、近くで見ると、ボーイッシュな女と、アイドルみたいな女の
子のカップルである。

私、久しぶりにママと会った

クリスマススイヴの日、かずみの母親がアパートに訪れた。

「かずみ。元気してた」

「ママ、今日はクリスマススイヴなのね」

「かずみに、ケーキとプレゼントを持ってきたの。で、窓際にいる、かわいいらしい女の子は誰なの？」

「この子、私の親友、メイちゃんです」と、かずみは元気な声で答えた。

メイは、かずみが未来に行ってサイボーグになって現代に戻った女の子。

20歳のかずみの母親は、メイを見て「とてもかわいい。良い親友ができたね」と言った。

「ねえ、かずみ お正月には、実家に帰って、ゆっくりしたら。それから、メイちゃんも来てね」

メイは、数年ぶりに、母親と再開し、感激して涙を流した。

「メイちゃん。どうしたの？」

メイは、どう説明すればいいのか判らなかつた。

「わたし変なこと言ったかしら」かずみの母親は、困惑した。

メイから見た母親は、かずみが30歳になって最後に見たときと比べて、とても若く見えた。

かずみもメイが何故泣いたのか理解できなかった。

メイは有機物で出来たサイボーグだが、水分だけは補給できるのである。

「ちょっと、お水が飲みたい」メイは、かずみに頼んだ。

メイは、かずみの前で水を飲み、また、涙を流した。

「メイちゃん。今日はちょっと変だわ」

メイは気を取り戻し、涙をタオルで拭いて、かずみの母親に、「かずみさんの実家に誘ってくれることを、光栄に思います」と言った。

かずみの母親は、メイが来ている服が、どこかで見たことある服だとおもった。

「ねえ、この服、かずみが来ていた服ではないの？」

メイは、女の子らしいちょっとピンクがかったワンピースを着ていた。

かずみ「わたし、こつゆう、女の子らしい服が似合わないから、メイちゃんに、今、着せたの」

かずみの母親は「メイちゃん。とても似合うわ。かずみも、自分の個性に合わせて、いい女になりなさい」と言った。

かずみ「ごめん、ごめん、ママ、遠いところから来たのね。お茶を出すのを忘れて、ごめんなさい」

「かずみ、そんなに気を使わなくても良いわよ」

かずみは、「ママ、お茶 何にする？紅茶、それとも緑茶？」

「かずみ、何でも良いわ」

かずみは、久しぶりに来た母親のために、とっておきのアップルパイを出した。

「メイちゃんも、お茶飲んだら」と、かずみが言うと、

メイは、「わたし、お茶飲めないの」

「メイちゃん遠慮しないで」と、かずみは言ったが、かずみは、メイがアンドロイドであることを思い出し、「メイちゃん、気が向いたら飲んでね」と言った。アンドロイドだから、かずみの母親が持ってきたケーキは食べられないと思った。

かずみは気を利かせ「ケーキは、後で良いわね」と言った。

かずみの母親とは、まるで友達みたいな親子だった。

かずみと母親と楽しい団らんの時間が終わり、かずみとメイは、母

親を駅まで送った。

「ママ、良いお年を！」

「かずみも、良い年を」

かずみの母親は、駅の改札口に入った。

かずみが、なぜ高スペックな女になったのか

かずみとメイは、恋人のように手を握り合いながら、身体を密着しながら自分のアパートに戻った。

かずみの口から、白い息がでるが、サイボーグとして現代に戻ったメイは、ほとんど口から白い息がでない。かずみは、いかにも男性が着るような黒っぽい服装で、メイは赤茶色のチェック柄のロングスカートに、暖色系のジャンパーを着ていた。遠くから見ると男女のカップルに見える。

「ボク、いや、わたし、こんなかわいい子と一緒になれて幸せ」かずみの一人称は「ボク」だが、20歳過ぎているので、なるべく一人称は「わたし」というように直している。

「わたしのアルバム見ない」とメイに話しかけた。

アパートに向かう道で、かずみは自分の少女時代の話しをした。当然、自分はビアンであることも告白した。

メイは、かずみが30歳の時に、自分の肉体を冷凍保存して、未来から戻ったサイボーグである。だから、かずみが次に何を喋るのか、全て解るのである。メイそのものが、未来のかずみなのである。

かずみの部屋に戻ったメイは、メイの服を脱がせた。それを見ると、まるで芸術のような美しさなので、かずみも服を急いで脱ぎすて、メイを後ろから抱きしめた。そして口づけをした。

「メイちゃん。身体が冷えているね。ボクが温めてあげるよ」とき

つく抱きしめた。

メイは、かずみの堅い身体を直に感じた。かずみの肋骨がダイレクトに感じる。メイは、少しきつく抱かれたたので、少し痛く感じた。

そして、かずみが、心地良い疲れに至り、そして、二人とも全裸で布団にはいる前に、かずみのアルバムを二人で見た。

アルバムには、親子3人でキャンプに行った写真が多かった。そして、父親はアウトドアが趣味であり、母はジムに通い、毎日、ジョッキングをしていた。かずみも小学生高学年の時から、運動するのが好きになった。

アルバムには、いかに健康的な家庭だという印象がある。

「ボクのママ、いや、私の母は、とても優しくて何でも相談にのってくれるの」

そして、かずみがなぜ、学力が高くなったのか話した。

「ママは、わたしに勉強をしなさいとプレッシャーを全然かけなかった。たぶん、小学校のとき、ママは、わたしになぜ勉強しないといけないか、ママが模範を示してくれたの。ママはいろんな資格を取るため勉強したのが、わたしにとって良い模範だったわ。それに解らないことがあったら、優しく教えてくれたの。そして、徐々に成績が良くなると、褒めてくれたけど、成績が下がった時は、全然、叱らなかった。だから勉強するのが好きになったの」

メイは、かつて自分が、かずみだった頃の記憶があるので、次に、かずみが、何を話すのか全て予測できた。

「ママが作った料理は美味しいし、いくら食べても太らない。身長だけが伸びたの」そして「勉強に関しては、決してプレッシャーをかけて伸ばそうとしないの。やる気がでるまで忍耐強く待っていたの」と話し、

メイは、十数年前の記憶をたどり、かずみに話しかけた。

「かずみさん。良いお母さんに育てられて幸せなんだね」

「いや、それだけではなく、パパも、とても尊敬できる人だわ。ママとパパは、いつも仲良し。いつまでも新婚の夫婦みたい。パパは、滅多に怒ることをしない。でも、躰が厳しいけど、良くできたら褒めてくれるの」と、かずみは語った。かずみは、褒められると伸びるタイプであることを、メイ自身が良くしているのは、メイは、かずみそのものだからである。

「でも、私、一人っ子だから、兄弟が欲しかった。それに、私はとても気が弱いし・・・」

メイは、かずみが将来、両親と別れることを決心するほど、強く未来への願望を持つことを知っていたので、一言だけ忠告した「かずみさん。いつまでも両親と一緒にいるわけではないわ。いつか別れる時が来る。たぶん。だから今のうちに両親を大事にして」と言った。

確かに、かずみを育てることでは、成功した。でも、いずれ近い将来、別れる時がくる。

まだ、メイと出会って一ヶ月もたっていない、かずみが尊敬した両親と永遠の別れを選ぶほど、未来へ行きたいと思いつけること。そして、その強い願望にとらわれる事を知らない。

かずみは、メイが必ず『かずみさん』というので、かずみはメイに「ねえ、メイちゃん。一つだけお願いしたいことがあるが、『かずみさん』でなく、『かずみ』と呼んでね」

メイは「かずみ、もしかしたら、わたし、いつまでも一緒にいられないかも知れない。それだけは覚悟してね」それは、過去の自分である、かずみへの心つかいだった。

メイはさらに「もし、わたしが去った後、いろいろと辛いことがあるけど、それに負けないでね」と伝えた。

メイは、かずみの未来を全て知っている。それは、メイが、かずみが未来から戻って来たサイボーグだからである。

かずみは、徐々に一人称「ボク」でなく「わたし」へと切り替えたことに気がついた。

「もう20歳だもんね。ボクというのも変。大人だし、来年は成人式だし、久しぶりに中学生の時のクラスメートに会うから、もっと成長しなければ」と、かずみは言って、メイと同じ布団の中に入って寝た。

人物設定 登場人物 変更あり（前書き）

自分で読みかえしましたが、読みづらい解りにくいところが多々あり、

登場人物をのせます。

登場人物は同時進行で連載している「かずみ、2200年の未来へ行く」と同じ世界観なので登場人物は共通しています。

人物設定 登場人物 変更あり

かずみ 年齢別に分かれている 共通しているのは、ピアノの女性

女の子を恋愛対象としている

女性の裸をみると性的に興奮する

黒い短い髪型で、顔がおとなし

い少年みたい

外見はいかにも元気あるボーイ

ツシュな少女だが

性格は、とても気が弱く、内向

的で、

泣き虫。だが女性に対しては積

極的

14歳頃のかずみ 耳が出るほど短い髪の型

一人称が「ぼく」

学力が高い、体力がある 高スペックな女の子

身長166センチ

性 20歳のかずみ 女子短大生、親元を離れて一人暮らししている女性

メイのことをアンドロイドとおもっている

身長170センチ

25歳以降のかずみ 大企業のOL

職場には秘密裏にピアノ系の性風俗店のアルバイト
をしている

30歳以降のかずみ Ⅱメイ 22世紀の科学技術で作られたサイボーグ

脳以外は有機物の機械で出来ている

メイ(アンドロイド199Jp) 未来から来たサイボーグ 20歳のかずみは、

メイをアンドロイドだと思っ
ている

身長165センチ

かずみママ 40歳代前半 考え方がモダン

週に4日パートの仕事しながら主婦の仕事を両

立している

かずみの良き理解者

かずみパパ 長距離通勤で働くサラリーマン 家族を養っ
ている

かずみの躰には厳しいが、滅多に怒らない優し

いお父さん

やさしい先輩

かずみが中学2年の時、強姦未遂事件で、

かずみを優しく介抱した美少女

異性に興味あるので、かずみが告白したとき振

ってしまっ
た

杏子

一見すると不良少女 でも内心 心が優しいと

ころがある

かずみの親友、いや親友以上の存在

杏子のパバ

教会の牧師

同性愛は許せないという立場にいる

2000年6月
で男性を憎む

中学2年

かずみが襲われる
それが切っ掛け

2001年5月

中学3年

かずみ 杏子と親友となる

2002年4月

高校1年

ミッシヨン系の女子高に通う

2003年4月

高校2年

制服がダサイと思う

2004年4月

高校3年

2005年3月

高校卒業

2005年4月

短大1年

2006年4月

短大2年

2006年12月

アンドロイド199^{マイ}Jpと出会う

2007年3月

短大卒業

2007年4月

就職

かずみ大企業のOLになる

2011年12月

アンドロイド199^{マイ}Jpと別れる

2012年1月

かずみ引越す 性風俗店のアルバ

イトをする

2016年

かずみ30歳 自分の身体を冷凍保

存するため渡米

2197年9月

かずみ 脳だけが再生され全身サイ

ボーグになる

2200年

かずみ 時空の歪みを体験する 過

去に戻る

2006年12月

20歳のかずみの部屋に戻る

2011年12月

かずみと別れる

その後は不明
たぶん2200年の未来へ戻る

久しぶりに実家に戻って

かずみはアルバイトに行くため、メイは部屋を留守することにした。かずみの趣向を良く知っているので、勝手に部屋を片付けても大丈夫である。そして、女性アイドルの水着のクリアファイルも1番古いものからちゃんと保管されている。

もともと、部屋はきれいに片付いており、簡単に少し散らかったところを片付けるだけである。

そして、何冊ものクリアファイルがあり、丹念に女性アイドルの水着姿の写真を集めていることを、メイは知っている。

メイが留守番しているとき、暇を潰したいと思ってオニーしたいと思っても、現在は21世紀の初めには、22世紀にあるようなバーチャルリアリティセンターがない。メイはオナナの肌が恋しくなり、電動式マッサージ器でオニーしようとして、感じやすいところに当てたら、脳内にあるコンピューターが、最大限の快感になるように刺激し続けた。

「わたし、サイボーグになっても気持ち良い思いができる。とても感激!」と、数時間に及ぶオニーをしたが、急激に眠気がして、気がついたら、かずみに起こされた。

「メイちゃん。裸のまま電動マッサージ器で何していたの?」

「頭がまだボーとしている。あれ、いつの間にか寝てしまった。私もオニーできるのね。」

「アンドロイドでも、できるんだ。でも、わたしと一緒に抱き合っ

て、口づけをしたほうがもつと気持ち良いわよ」と言っ、かずみは服を脱ぎ捨てて、メイを抱いた。

かずみは、夕食は軽く食べるだけで、赤ワインにチーズをおつまみにして寝る。

「ねえ、メイちゃん。明後日は元旦、わたしの実家に行こうか」と言われ、メイは十数年ぶりに自分の実家に戻れることを楽しみにした。

かずみはメイであり、メイはかずみの未来の姿である。

そして、大晦日は、メイと一緒に初詣に行く準備し、メイと一緒に一夜を過ごした。

女二人だけでとても幸せだった。

そして元旦になり、メイとかずみは、実家に戻った。

メイは十数年ぶりに自分の実家に戻り、感慨深いものを感じた。

かずみの実家といっても、少しだけ広い3LDKのアパートであり、家賃もちよつと高い感じである。

かずみの部屋もちゃんと残っており、それを見たメイは、久しぶりに自分が学生時代を過ごした部屋をみて感動して涙を流した。

「メイ、どうしたの？なぜ泣くの？」

メイは何と答えたら良いのか解らない。

かずみが引越したため、荷物が少なく閑散としているが、かずみが小学生の時の作文や絵など残っている。

かずみは、自分の小学生の時の思い出をメイに話した。メイは、かずみが次に何を言うのか予測できた。

かずみママは「メイちゃん。かずみ、お雑煮ができたわよ」と呼ばれ、かずみはメイはアンドロイドなので、物を食べられないことを知っている。

「ママ、ごめんね」

「どうしたの」

「実はメイちゃん。お腹の具合が悪いので、今日、お雑煮が食べられないの」

「じゃあ、おせちを作ったから、あとでメイちゃんと一緒に食べましょう」

かずみママは「メイちゃん。大丈夫？どこか具合が悪かったら遠慮しないで何でも言っつてね」と言った。

メイは水だけ飲めるので、水をお願いした。

「ちょっと喉が痛いので、お水ちょうだい」と言ったら

かずみママは「もしかしたら風邪かも知れない。遠慮しないでゆっくり休みなさい」と言われ、かずみが使っていたベットがあった場

所で、布団を引いて寝た。

かずみに対して「わたしアンドロイドだから、変に気を使わせてしまつて、ごめんね」と言うと、

かずみは「いいよ。そんなに気を使わなくても」と言って、

そして、かずみは久しぶりに両親と団らんの時を過ごした。

元旦の一家団欒

かずみと、かずみの両親の3人の笑い声が、隣の部屋にいるメイの耳に聞こえる。

メイは、まだ、かずみだった頃、20歳のお正月に、両親とあって楽しい会話をしていることを思い出した。

そしてメイは、かずみが使っていた部屋で、布団の中で横になった。起き上がり、服を着て、かずみの両親がいる部屋に入ってきた。

「メイ、もう大丈夫？」と、かずみは話しだし、

「あら、無理しなくっても良いわよ。もし良かったら今夜、泊まっても良いわよ」と、かずみママはメイに話しかけた。

「お腹すいていない？」と話しかけた。

かずみパパは、メイがとてもかわいい顔しているので、うっとりし、かずみママは嫉妬した。

「あなた。いい歳して、メイちゃんは、かずみの親友だからね」と言った。

「メイちゃん。アイドルになったら売れるわ。で、街を歩くと声かけられない？」

「いいえ」とメイは答えた。

「ぼくと違って、メイは、とてもキュートだから」と言つと、

かずみママは「かずみもボーイッシュでかっこいいわ。二人はお似合いだと思う」と言った。

「いけねえ。つい自分の事を、『ぼく』と言っちゃった。訂正して、私と違ってメイは、とてもキュート」と言ったら、かずみの両親は笑った。

「ぼく、いや、わたしは、もう二十歳だから大人だもん。いや、大人だから。」

「無理に直さなくてもいいわよ。かずみ」と、かずみママが言った。

メイはピンク色のセーターを着ていたが、サイボーグだから寒さを全く感じない。

そして、黒く厚いストッキングに膝丈の長さのチェックのスカートを履いている。ややピンクがかった、ビニールのバックを持っている。

「ほとんど食べられないのは残念だわ」と言っ、「私たち二人だと余るから、お土産に持って言ってね」と言っ、「かずみママはタッパーにお節料理を入れた。」

ボク、一晩中、愛撫されるの？

かずみとメイは、かずみが使っていた部屋で、二人で一晩過ごそうとした。

もう一つ布団を敷いたが、かずみが大きな男性用のシャツを着ると、まるで、とてもおとなしそうな男の子のように見えた。メイは、かつての自分が、思ったよりも女らしくない顔したことを実感した。

メイとかずみは、同じなのである。20歳のかずみは、いずれメイになって未来からサイボーグになって現代に戻って来るからである。

だから、20歳のかずみが次に何をしようか全て予測できるのである。いや、その予測を変える事は未来を変えてしまうからである。未来を変えれば、別の時間軸が生じるのである。

かずみは、過去のことを話した。メイはこれから言うことを全て知っている。かずみは「わ、わたし」と少しもった。なるべく「ボク」と言わないためである。「この部屋で学生時代を過ごしたわ。杏子という女の子は今、どうしているのか解らない。元気していればいいのに」と思ったとき、かずみの携帯電話のベルが鳴った。

「あれ、誰なの」

着信者の名前をみると「杏子」だった。

「もしもし、杏子。ひさしぶり」

『久しぶりではないだろ。今は、おめでとうだろう！で、今、近く

に寄ったけど、いま、来ても良いか？お前と一緒に、たのしい時間を過ごそうではないか』と男まさりな言い方をした。

これから、メイと同じ布団に全裸で一晩一緒にいるつもりだったが、杏子は嫉妬深い。メイがいることを知ったら、どうなるか解らない。どうしようかと思っ、かずみは涙目になった。

メイは未来の事を全て知っている。それは、5年後に時空の歪みが生じたとき、未来に帰らなければならぬ時までのことである。

メイは提案した。「あたしダイニングキッチンで寝るから。もし、何かあっても杏子は、そんなに心が狭い子ではないから安心して」と、メイは、涙目の、かずみを安心させようとした。「それ、何の根拠があるの？」と、かずみは疑問に思った。メイが杏子のことを知っているわけがないと思ったからである。

ドアを叩く音がした。

たぶん杏子である。

ドアを開けた。杏子は、少し酔っていて、ちよつとアルコール臭い。暗いキッチンで、メイは毛布にくるまりながら息を潜めた。

杏子と久しぶりの再開をした。中学3年から高校時代までの学生時代の思い出話をしたかった。

「お前、元気していたか？元気なようだな」

深夜1時である。かずみのママとパパは寝ている。

「杏子ちゃん。元気だった。でも、パパとママは今、寝ているから静にして」

「わるい。わるい。で、短大のほうはどうなんだ？」と少し小さな声で尋ね

「ぼく、短大でも楽しくやっているよ」と、昔のように一人称を「ぼく」と言ってしまった。

杏子は「あたし、就職したら、いきなり遠くに飛ばされ、地方の田舎町の職場で仕事させられて、お前とは、なかなか会えなくて寂しかった。女の肌も恋しかった」

「ぼくも寂しかったよ」と、かずみは言った。

「ねえ、24時間営業の居酒屋に行かない？これからタクシー呼ぶから朝まで飲もうよ」と、かずみはメイのことを気にかけた。

「いや！お前の肌が恋しくなっただけ、一晩、一緒にお前を愛撫させるよ」と言って、かずみの太ももを揉んだ。そして、男もののTシャツにショーツだけの姿だから、上半身だけ見ると、少年みtainな顔をしていた。ブラジャーを外しているので、かずみの胸が露出していたが、Yシャツで乳首だけを隠していた。

杏子は、かずみの胸をしばらく見た。

かずみの顔を見て「お前の少年らしい顔が一番なんだよ！なんだか、そんな顔が、あたいの女心をくすぐるから」と、杏子は、かずみの頬を指で触った。

「なんというか、お前の顔は、なんというか中性的で、あたいの母性本能をくすぐるから、かずみのことは、今でも大好きなんだ」

「で、他に女の子との肉体関係ないだろう？」と、杏子は訪ねた。

かずみは、どうしたらよいのか解らなかった。杏子は嫉妬深いから、もしメイが見つかったらどうなるか、解らないからである。

「でも、ボクを愛撫する前に、一緒に二人でシャワー浴びようよ」と、かずみは提案した。

かずみはYシャツを脱ごうとしたとき、杏子は「お前ほど男もののYシャツが似合う子はいない」と言い、「脱ぐな！」と言われ、杏子と一緒に風呂場に行った。メイは暗いダイニングキッチンで身を潜めた。

「暗いから電気つける」と杏子がスイッチを手にしたとき、かずみはスイッチ入れなくても大丈夫だと言った。

そして二人でお風呂場に向かった。

かずみ、杏子に見つめられて

脱衣所で杏子と、かずみの二人がいた。

かずみは男もののYシャツを肩にかけ、ショーツだけを穿いている。胸は見えるがYシャツに乳首が隠れている。

杏子は、かずみの胸を指で触りながら「ねえ、かずみ。あたし、あなたの中性的なところが大好きなの。胸はほとんど膨らみがないし、身長が高くて脚が長い。そうゆうところが、母性本能をくすぐるわ。あたしを好きなだけ抱きしめて」と言った。

「あたし、長い間、田舎町の職場で男の人ばかりで、あたしみたいなビアンと出会う機会がなかったから、オナナの肌が恋しかった。ねえ、あたしを強く抱いて・・・」と杏子は、かずみに抱いてもらうことを願った。

「いいの。はじめての時のように、強く抱いても」と、かずみは弱々しく少年のような言い方をした。

「好きにしていいわ」と言って、かずみはYシャツを脱ぎ、杏子も服を全部脱ぎ全裸になった。

そして、二人は抱き合った。

「杏子ちゃんの身体、とても柔らかい。心地よい弾力があるね」と、かずみは力を込めて抱き続けた。

「痛い」と杏子が言ったとき、

「大丈夫？」と、かずみが言った。

「おまえ、遠慮しなくていいぞ」と答えた。

そして、かずみは杏子の唇に近づき、そして口づけをした。

そのような状態が10分くらい続いた。

そして、かずみはショーツを脱いで、二人はお風呂に入った。

「杏子ちゃんと二人でお風呂に入ったのは、久しぶりだね」と、かずみは杏子の手を握った。

お湯に出ている、かずみの胸の上部を、杏子は凝視した。

「お前、相変わらず、十代のときと同じきれいな肌しているな」

「杏子ちゃん、恥ずかしいこと言わないで」

「お前、どうしたら、そんなにきれいな肌が保てる？」と杏子は質問したが、かずみは答えようがなかった。

そして、杏子は、かずみの頬を指で触りながら「お前の顔は、中性的で、あたいの母性本能をくすぐる。変に女ぼすぎない、とてもかわい顔しているよ。お前は」と言った。

かずみの黒く短い髪の毛は、まるで、とても大人しそうな長髪の少年のようだった。

髪から耳がでていいる。やさしく大人しい少年みただった。確かに、

少年なのか少女なのか、区別しにくい顔つきをしていた。

杏子は、長い髪をポニーテールでまとめて、お風呂に入るとき、髪の毛が濡れないように、後ろ髪をアップさせた。

杏子の身長は155センチで、少し小柄である。

長身な、かずみは女性としては身長170センチで背が高いが、男性と比較すれば標準の身長である。

杏子の身体は、かずみと比較すれば、より女らしいのである。

杏子に無いものが、かずみにある。女性として高い身長、そしていかにも少年という顔つき。そして、母性本能をくすぐる雰囲気。そこが杏子が、かずみに引きつけられるものである。

二人は、お風呂からでて、大きなタオルで身体を拭き、ふたりはバスタオルで身体を巻き付けた状態で、真っ暗なダイニングキッチンを通り過ぎ、かずみの部屋に入った。

メイは真っ暗なダイニングキッチンの奥で、毛布にくるまりながら息を潜めていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8261z/>

私、サイボーグになって現代に戻ってきました

2012年1月14日06時53分発行